忘れられたもうひとつの銅像——横山隆興像

森　仁史

大正五年（一九一六）四月十二日付『北国新聞』は横山隆興（図1）が風邪から肺炎を併発し重患と伝えた。四月十四日には従六位が授与された。しかし、隆興は四月十五日午後八時半に自宅で死去、享年六十九歳であった。十八日午前六時に霊柩は高岡町の自邸から兼六公園に隣接する八坂の菩提寺松山寺に向かい、葬儀が執り行われた。永平寺、総持寺貫首をはじめ済生会総裁秩父宮、日本赤十字社社長花房義質ほか七十六通の弔辞が代読され、前田利為侯爵、大隈重信ほか三百通余りの弔電が披露された。その後九時半に同寺を出棺し、野田山墓地に埋葬された。

藩政期の加賀前田家には、尾張以来の重臣とされる八家が定められ、横山もそのうちのひとつであった。横山家の維新時の当主は隆平であったが、この叔父に当たるのが隆興であった。隆興は嘉永六年に藩校明倫堂へ、その後壮猶館で鉄砲及び英式兵法を学び、大阪に出て大阪開成学校で洋学を学んだ。若くして進取の気性に富んだ生き方だったようだ。明治二年に帰郷し、宗家の家禄二二三八俵余りから一三一俵を分け与えられ別家を立て、浅野川沿いの横山家屋敷の一角に住まった。秩禄処分後に横山家が経営していた金融会社、苟完社へ明治十二年（一八七九）に尾小屋鉱山（現小松市尾小屋町）から融資が要請

1　横山隆興ポートレート
（『故横山隆興君追善会誌』所収）

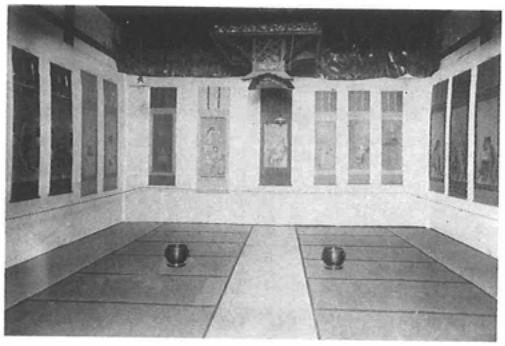
され、これに応え翌十三年から鉱山開発に投資し十四年には鉱業権を買い取り、横山隆平が社主、隆興が鉱長となった。始めは失敗続きで、借金を重ねたが、二十年に有望な鉱脈を掘り当てた。とくにこの隆興は現地に近い小松に移住し、鉱脈を発見するまで、試掘を続けさせ、このための金策に奔走し、技師たちを鼓舞したことが最終的な成功を導いたので、第一の功労者であったことは間違いがなかった。明治三十七年岐阜県平金鉱山を合併し、横山両家の個人経営から両者合同の横山鉱業部（金沢市大手町）に組織変更され、四十年には郡内金野村の大谷鉱区を買収し支山とし、山形県最上郡の大蔵鉱山、秋田県仙北郡宮田又鉱山も買収し、ますます事業を拡張させていった。明治三十八年（一九〇五）の銅産出高に対し、大正元年（一九一二）には二倍を超え、五年（一九一六）には三倍を超えた。大正六年には鉱山に一六〇七人が働く規模になった（図2）。同年の農商務省統計によれば、日本でもっとも大きな足尾銅山の一割強の産出高であり、全国で九番目の銅山に数えられ、いかに急速に発展したのかが分かる。

横山隆興没後一年を期して、大正六年九月に故横山隆興君追善会が八家のひとつ本多政以を総代とし、四二四名を以って結成された。会員のなかには、山川孝次、須田菁華など工芸作家の名前も見えている。同会については後に『故横山隆興君追善会誌』が編纂されており、同書に依れば、準備は法会、古画席、書画席、茶席係などに分かれて担当委員を定めるという大掛かりな計画であった。十一月二十五日、横山家位牌室のある松山寺で法要が営まれた。書画骨董、俳諧、能楽、囲碁、盆栽と広くたしなん

2　尾小屋鉱山

だ故人生前の趣味を汲んで、法会控席も床の掛物、香道具、花生、文房具、手焙など委員が趣旨に沿った所蔵品を飾り付けた。仏式による法会終了後、仮設舞台で能楽が奉納され、演目は枕慈童、実盛、巻絹、三井寺、仕舞（玉之段、融、田村、天鼓）、遊行柳、石橋であった。追善会は隣接する三寺を合わせて執行され、行事の場所と内容は次の通りであった。いずれの席にもそれぞれの趣向に合わせて、床が飾られた。

鶴林寺　浄斎席（四重組紫白蛇腹組紐付折詰）
雲龍寺　挿花・盆栽席
安楽寺　俳句・碁将席
永福寺　書画・古書画席〔図3〕


3　書画席（『故横山隆興君追善会誌』所収）

法会の翌日、十一月二十六日に嗣男、横山章が発起人その他を市内長良町の同家別荘に招待し、園遊会を催した。六三七名が参集し、おでん店やビヤホールの模擬店と落語や奇術などの余興を楽しんだ。この別荘は寺町台地の東端に位置して、崖上から犀川を眼下に小立野台地から医王山や遠く白山まで眺望が開ける絶景を楽しむことができる。現在はその一部が辻家住宅として引き継がれ、庭園は名勝として金沢市指定文化財に指定されているが、この別荘は横山鉱業部の接客用の建物として建設したものである。

4　辻家住宅庭園の滝

とくに庭園は態々京都から植治こと小川治兵衛を招き、施工させた。見所のひとつ崖の落差を利用して設置された滝〔図4〕はこのとき建造されたもので、金沢では初めての鉄筋コンクリート建造物であるとされている。これ以前にも、横山隆興は明治三十四年（一八九一）に高岡町に移転したときも、自身が造園を指揮し、耕運渓と名づけられたその結構は金沢名物となったほどだったので、この別邸の造成にも横山の意思が働いたと見ていいだろう。

こうした豪勢な追悼事業はひとえに尾小屋鉱山の盛業の故なのだが、その破格振りから当時の勢いがしのばれる。さらにまた、大正九年（一九二〇）には、大阪朝日新聞記者で流行作家でもあった渡辺霞亭に執筆させて『横山隆興翁』が刊行された。同書でも、鉱山開発の経緯と講談調の成功譚にもっとも多くのページが割かれている。

＊

横山は企業家として成功しただけでなく、公共事業へ並外れた献金を続けていた。新聞に紹介されたうち主なものだけでも次の通りである。

明治二十七年　日清戦争陸軍恤兵部へ寄付　五万円
三十四年　飛騨郡大野郡丹生川村道路建設へ寄付　七二七五円
三十七年　日露戦争軍費として寄付　一万円
〃　国庫債券募集申込み　二六万円
三十九年　国学院大学創設に寄付　二五〇〇円
四十二年　恩賜財団済生会に寄付　一万円

このようななか、横山在世中に彼の銅像建立が実行され、明治四十五年（一九一二）五月十五日、隆興六十五歳の誕生日を祝して、除幕式が行われた〔図5〕。銅像は尾小屋鉱山を経営していた横山鉱業部の社屋前に建てられることになった。像高五尺八寸、重量百二十貫の原料は総て尾小屋産の銅を使用して鋳造されたという。像の制作は水野源六、朗（キヨシ）の手になるものであったが、この水野源六

5　横山隆興像除幕式
（『道を拓く　横山商会九十周年記念誌』所収）

家は金沢で後藤家と並んで装剣を専らとする彫金を家業とする名門であり、後藤家が京都から技術教習のため招かれたのに対し、それより古く畿内より移転して金沢に定住した一家であった。江戸などの白銀師が生彫と称される奢侈に流れたのに対し、桃山風な温雅な遺法を伝えたとされる。

ご多分にもれず、金沢でも金工職人は廃刀令とともに塗炭の苦しみを味わうことになったが、ウィーン万博の活況に救われた。輸出向けの制作を目的に、明治十年（一八七七）金沢銅器会社が設立されたときには、水野源六家は業務取締役を務めており、波乱の時代に斯会の要を担ったようだ。この銅像建設のときの水野源六は第九代光春であり、明治十五年京都画学校に入学し、望月玉泉に学んでいる。また、銘盤には中洲三島毅撰文、日下部鳴鶴書になる碑文が刻まれた。三島は二松学舎創立者として知られるが、国学院大学教授を務めていたから、この機縁で依頼されたのかもしれない。この他、左側の銅板には「尾小屋鉱山坑内採鉱図」、右側には「精錬鋳銅図」、後方には「選鉱手撰盤図」が刻まれた。

後に十代源六となる朗は石川県立工業学校窯業科に学び、東京美術学校で彫塑と鋳金を学んだと自筆履歴に書き残しているが、美校卒業生名簿にはその名が見当たらない。あるいは、県立工業で教鞭をとっていた青木外吉が明治三十四年美校彫塑科卒業なので、何らか紹介してくれたのかもしれない。朗は明治四十二年の第三回文部省美術展に《ひな菊》と題して、時代を風靡していたロマン主義的気分濃厚な裸婦像を出品し、入選している。先の履歴書に依れば、大正四年（一九一五）八月から二年間米国各地の金属工芸視察に農商務省から派遣され、以後家業の象嵌以外に「縮小機によるメダルの製作、電鋳及新合金の研究と銅像の製作を開始（原型鋳金共自宅工場にて）」したと記している。だとすると、横山隆興像は水野家にとって、かなり早い事例ということになる。

大正九年（一九二〇）から十一年にかけて、尾小屋鉱山では五回のストライキ、労働争議が起こり、この頃から銅価の下落とともに経営が苦しくなった。そして、大正十三年三月十日、京都美術倶楽部において横山家所蔵品入札が行われており、隆興没後十年を経ずして、横山宗家は家産の多くを失うことになったと思われる。柿木畠の本邸は湯涌江戸村に移築され、大東亜寺本堂となった。横山鉱業部は昭和三年破産し、尾小屋鉱山はその後昭和六年（一九三一）に横山家の手から久原鉱業に譲渡された。この後、横山の名は金沢でも次第に忘れられていったようだ。昭和三年発行の『偉人の俤』（二六新報社）には、銅像は松山寺に所在と記してあるので、横山鉱業部解散と同時に移設されたのであろうか。同書挿図写真では銘盤は失われているし、銅像そのものも現存していない。

しかし、昨年隆興の三男登（すすみ）が創業した企業が『道を拓く　横山商会九十周年記念誌』をまとめ出版した。同じ年、金沢ふるさと偉人館で「横山隆興」展が開催されたし、今年は徳田秋聲記念館で「横山家と秋聲」が開催された。これによれば、徳田家は横山家の家臣であり、秋聲の次兄正田順太郎は明治十八年から鉱山経営に従い、後に鉱山長を勤めた。旧主への恩義に厚く、終生横山家に尽くし、「古い主従関係の情誼」（「籠の小鳥」）に縛られた兄と秋聲とでは折り合いが悪かったが、横山鉱業部のあまりにもあっけない最期ゆえに兄が晩年報われなかったことに、秋聲は同情を禁じえなかったようである。また、つい最近辻家住宅には結婚式場建設が計画され、これが実現すれば庭園はより多くの人々の目に触れることになりそうである。近頃になってなにやら、横山周辺はなにかと新たな動きが重なってきている。近代の遺産に目が向けられる時代がめぐってきたようだ。

一寸

第五十一号　二〇一二年八月

第五十一号目次

新・旧刊案内51　青木　茂　1
二万分一迅速図と冬崖の死
長谷川竹葉の錦絵　岩切信一郎　10
―高橋由一や山形・日光の名所風景をめぐって―
時に抗いし者たち――私の小菩薩峠（7）　大谷　芳久　17
近代日本画の構図決定格子（一三）―長谷川等伯　金子　一夫　48
あおぞら　丹尾　安典　53
「初摺り・後摺り」から　銅・石版画遺聞46　森　登　60
忘れられたもうひとつの銅像―横山隆興像　森　仁史　66
東郷青児の本　山田　俊幸　69

新・旧刊案内51
二万分一迅速図と冬崖の死

青木　茂

■本誌先号に先師土方定一が引用した冬崖の「小生は町絵師と申すものに成積り之処」とか「五月十五日は大雨中……上野にて大戦争有之」と彰義隊戦争のことなどを書いた書簡はまゆつばものだと僕は書いた。また師橋辰夫は「明治十六年（一八八三年）冬崖亡きあと陸軍部内に残っていた近藤正純（教導団出仕）中丸精十郎（戸出学校出仕）も退官、……冬崖門下の洋画家達は全て去り、明治初期陸軍地図部門の製図の基本となった洋画の灯はここに消えた」としているが、明治十九年七月の官員録を見ると陸軍教導団に御用掛准奏任の近藤正純、権田守吉があり、陸軍士官学校に図画学教官として十二等出仕　佐々木（河北）道介、同　小笠原済、十三等出仕　伊東信秀、同　井上荘輔、同　榎本正忠、十六等出仕　春日知強、さらに御用掛准判任として本多錦吉郎、新任の同　松井貞世、同　中島孝久が録されている。中丸精十郎も十八年七月版に御用掛准判任として名が載っている。このうち近藤・中丸はもちろん佐々木・伊東・井上・榎本は明治六・七・八年以来若くても冬崖の同僚であり、冬崖死後も陸軍の図画学教官であり続けた人々である。軍隊は画家を育てる機関ではないから画家となった軍人はいないが、図学画学を学んだ軍人は無数であり、教えた教官も多くその名の知れるだけは本誌先号に記した。明治十六年で「洋画の灯はここに消えた」などと片付けられるものではない。「明治初期洋画壇と陸軍省参謀局」という専論の内容は官員録すら見ない貧寒なもののようである。と、先号に書いたことを要約しておく。

■次に、多色線号渲彩色小地測量輯合図という六かしいものについて書き